

令和5年度 第4回京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会会議録

1 開催日時：令和5年8月3日（木）13時30分～15時30分

2 開催場所：京丹後市役所大宮庁舎 4階 第2・3会議室

3 出席者：

井上 知英 委員

今度 義則 委員

岡田 泰行 委員

荻 弦太 委員

古賀 稔邦 委員

高橋 一也 委員

田茂井 勇人 委員

竺沙 知章 座長

中川 哲 委員

木島 里江 委員代理

塩川 達大 オブザーバー

田中 努 オブザーバー

(欠席者)

浅井 智美 委員

岩本 悠 委員

長井 悠 委員

牧野 光朗 委員

事務局：

京丹後市副市長

濱 健志朗

京丹後市教育委員会 教育長

松本 明彦

京丹後市 市長公室長	川口 誠彦
京丹後市教育委員会事務局 教育次長	引野 雅文
京丹後市市長公室 政策企画課長	松本 晃治
京丹後市教育委員会事務局 学校教育課長	川村 義輝
京丹後市教育委員会事務局 教育総務課長	西村 隆

#### 4 議 事

- (1) 中間まとめ (案) について
- (2) 子どもたちへのアンケート (案) について
- (3) その他

#### 5 公開又は非公開の別 公開

#### 6 傍聴人 2名

#### 7 要旨

教 育 長：皆さんこんにちは。早いものでこの検討会につきましても、準備会を合わせまして第6回目になります。これまで5回の中で、様々な委員の皆様からいただいた大変貴重なご意見を、何とかまとめるという形で、今日は中間まとめの案として示させていただいているところです。ぜひとも、この案について、忌憚のないご意見をいただけたらありがたいなと思っています。

また、検討会でもたびたび出てきています、Kyotango Sea Labo という取組を、いよいよ来週木曜日からスタートすることになっております。教育の人材育成の在り方の中心的なプログラムでもありますので、委員の皆様の中でも見ていただける方がありましたら見ていただき、ご意見をいただけますとありがたいです。

本日は、忌憚のないご意見をお願い申し上げまして、開会のごあいさつとさせていただきます。本日もどうぞよろしく願いいたします。

(1) 中間まとめ(案)について

座 長： 本日は中間まとめ案ということで、これまでの議論を踏まえて、今後を見据えながら、どうまとめていけばいいかについての議論の場だと思いますので、忌憚のないご意見をいただければと思います。それでは次第3の議事に移りますが、京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会中間まとめ(案)について、事務局よりご説明をお願いいたします。

事 務 局： (事務局より説明)

座 長： どうもありがとうございました。この中間まとめ(案)について、ご意見あるいはご質問をいただきたいと思います。非常に分量が多いので、まず問題意識と、教育・人材育成の方向性というところで何か気になられたところがありましたらご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。具体的な取組のところ、4つのプロジェクトにまとめていただいています。このプロジェクトについても4つの具体的な取り組みということで、1つ目の「学びの変革プロジェクト」は21ページから24ページまで示していただいています。2つ目の「子ども主体」学び舎再設計プロジェクト」は、25ページから27ページで具体的に提案をされています。3つ目は「学びのボーダレスプロジェクト」として、中高の連携の問題について記載されています。4つ目は「地域まるごとプロジェクト」ということで、学校、地域、企業の繋がりを記載されています。気になるところから結構ですので、ご意見をいただければありがたいんですけども、いかがでしょうか。

委 員： プロジェクトを幾つか例示いただいているところですけども、具体的なアクションとしては、STEAM教育に時間をしっかり割いていきますというところが一つ読みとれたところで、それ以外のところは、環境を整えますというニュアンスが強いのかなと思って見ておりました。より具体的な取り組みとして、そのSTEAMを下支えするような、ベーシックな情報教育みたいなものが必要なのではないかなと見ておりました。夏の教員研修や地域の講演の際に、GIGAスクールが立ち上がって子どもたちが端末を使い始める中で、検索等で情報を見る際の一番のリソースがYouTubeというような調査結果も先日出ておまして、そんな中、子どもたちがYouTube上の都市伝説サイトみたいなところを見て、ありもしないようなものを本当にあると思込んでいて

先生がびっくりした、みたいなことがよく聞かれていまして、情報リテラシーの教育というところが、非常に重要なポイントになってくると思います。その上に、プログラミング等のよりよい利活用の部分があると思うんですけども、これはすでに京丹後市の情報教育の中で、そういった部分にしっかり時間をとって、情報リテラシーの教育がなされているということであれば、このプロジェクトで特出しする必要はないかと思うんですけども、特に小学校で、情報リテラシーと生成 AI との付き合い方のような部分に、しっかりと時間を割いた上で、ベーシックなスキルを持っている状態で STEAM 教育に取り組まないと、土台の部分がないと難しいなと思いながらお聞きをしておりました。以上です。

座長：ありがとうございます。具体的にご意見をいただいたかと思うんですが、京丹後市の現在のいわゆる情報教育、あるいはリテラシーのところで、ご判断されてこういう提案になっているかというところをまずご説明いただいでよろしいでしょうか。

事務局：京丹後市として、まだまだ進んでいるというふうには捉えておりません。それぞれのやり方でやっていたことを、学園できっちりと整理をし、発達段階に応じてリテラシーを積み上げていかなければならないという、ようやくそういう動きになってきたかなと思います。また、生成 AI との付き合い方については、ガイドライン的なものは市として何か示しているということもまだありませんので、委員に言っていたかとおおり、できているからここに載っていないという段階ではないと捉えているところです。

座長：そうしますとそのあたりも書き込んだ方が、プロジェクトとしてはより実効性があるということになるかなと思いますけど、委員そういうご意見として受けとめてよろしいでしょうか。

委員：そうですね。この STEAM 教育のベースにある情報教育をまずしっかりする必要があります。多分保護者も心配されていると思うんですね。子どもが端末を持って帰ってきて、玉石混合のインターネットの情報を子どもたちが見て、正しく理解できているのだろうかという不安に対して、しっかりできていますよということ、まずベースの教育としてやるべきですし、地域に対しても、特に保護者に向けて、取組をしっかりしているんだということ

をPRした上で、それをより良く利活用するSTEAM教育があるんだというふう  
に示さないと、東京の方だと子どもがiPadを持って帰ってきてずっと家で夏  
休みにYouTubeを見ているみたいなことが問題視され始めています。実は文  
部科学省も次のGIGAスクールを考えるとときには、やっぱり子どもたちがどう  
いうメディアに接触しているのかというところをしっかりと把握していきま  
しょう、する必要があるといったことが議論されていて、そういった部分の  
取組を具体的に書き込んでいけるといいなと思っております。

座長： ありがとうございます。教育の方法や内容とともに、私たちの認識も問わ  
れているところだと思います。新しい教育に取り組んでいく際に教育のこと  
だけを考えて進んでいくわけにはいかないわけで、社会の変化の中で、こう  
した問題が起きてきているわけです。それとしっかり向き合いながら新しい  
教育に取り組んでいくという姿勢の問題、認識の問題というのは問われてき  
ているのだろうなと思います。そうしないと後追い後追いになってしまいま  
すので。問題が起こらないと、その問題に目が向かないというのは、新しい  
教育を進めていく上での姿勢としては不十分ではないかなと感じますので、  
そういうところをしっかりと受けとめてもらいたいと思います。そういう視点  
でのご意見として、非常に重要だなと感じます。STEAM教育についてまず具体  
的にご意見をいただきましたので、STEAM教育について、さらにご提案、ご質  
問ご意見がありましたらいただきたいと思うんですがいかがでしょうか。

委員： 23 ページのところになります、学びの変革のプロジェクトについての質問な  
んですけれども、中学校2年生の例が出されておりますが、中学校の理科や  
数学は、非常に系統性の高い学びで3年間積み上げられているというふう  
に想像するわけなんですけれども、こういう形で、時間の方を理科、数学の方  
から取り出して、総合的な学習の時間、探究の時間を確保するということ  
について、従来必要とされている系統的な学びの時間であるとか、内容・レベ  
ルの保障について、その辺りは心配はないんでしょうか。

座長： その点いかがでしょうか。

事務局： ありがとうございます。あくまでも例という形で挙げさせていただいて  
いるんですけれども、中学校2年生であれば数学で統計等の学習があったり、理  
科では生物の学習も入ってくる中で、それぞれの教科の中でも、その学びを

活かした探究の時間数が、今の教科書、指導内容には含まれていることもありますので、今の指導内容を考えた場合5時間程度なら総合にもって行って、よりデータサイエンス的な部分を総合で発揮させたいというような考え方からこの案を出しましたので、あくまでもこの内容・時間であれば可能ではといった考え方を見ていただくと大変ありがたいです。

座長：時間のやりとりだけではなくて、ある程度全体の構造の問題になってこようかと思しますので、従来の数学のやり方でやっていたことを、この探究の学習でやっということだと思いますし、その際に、先ほど情報リテラシーの基礎ができているかというご質問とも絡むと思うんですけど、基礎的な部分をどこでどういう形でしっかりやってカリキュラムを作っていくかという問題になってくるかと思うので、単に時間数のやりくりっていうところでの問題ではないかと思えます。

今、STEAM教育を中心にカリキュラムの問題についてご意見が出ています。他いかがでしょうか。

委員：また中身は検討して、さらに現実的だったり具体的なものを作成されると思うんですが、中学2年生の場合、総合的な学習の時間を使って、職場体験学習を取り組んでおります。そういう面でこのプロジェクト1を見ると、社会を支える企業に出かけ、体験を通して考えたことをまとめようという、この中身については随分迫ることができるように思います。今各校が取り組んでいる職場体験学習は、大変教育的な効果もありますし、意義が高いものですので、その辺の意義や効果をしっかりと押さえた上で、再度また構築しまして、それを組んでいくというのは、すごく方向性としては良いように感じます。

座長：そうした各学校でしっかり取り組まれていることを、うまく活かしながらということになろうかと思えます。市全体のカリキュラムと、各学校のカリキュラムとでいうところになってくるかと思えます。他いかがでしょうか。

委員：大変素晴らしくまとめられていると思って拝見しておりましたが、ちょっと気になったこととして、例えばプロジェクト1は4つのスライドできていると思うんですけど、学びの変革プロジェクトで多分一番大事なところは、22枚目のスライドの学生一人ひとりの主体性が生まれる教育へ変革するとい

う、これが学びの変革だというふうに理解したんですが、これがロードマップのスライドに行くと、プロジェクト1という記載になり、学びの変革プロジェクトというタイトルがなくなっていて、プロジェクト1は何だったのかとページを戻って見ないといけない。さらに、先ほど申し上げた学びの変革で一番大事と思われる、子ども一人ひとりの主体性が生まれる教育へ変革するという部分がロードマップのところに無いように感じますが、その辺はいかがなものかなと。ロードマップのタイトルのプロジェクトを1、2、3、4とするのではなく、そもそものタイトル、学びの変革プロジェクトとか、子どもの主体性、学び舎再設計プロジェクトというタイトルで書かれた方がわかりやすいと思いました。以上です。

座長：非常に重要なご意見をいただいたんですけども、学びと主体性について、一つの主体性が生まれるという記載がありますが、この辺りの見通しについて、はっきりと今の段階でそうなりますとは言えないと思いますけれども、今の京丹後市の子どもたちの現状から考えて、これぐらいの時間をかけてやっていけば、目指すところの学びが実現できるのではという辺りの見通しはいかがでしょうか。

事務局：与えられるものを学んでいくという、まだその段階であると捉えております。昨年度、丹後学モデルカリキュラム改訂版を出させてもらっており、子どもたちが主語になって学ぶ、そういうカリキュラムに変えていきたいというところは、本当にこれからの段階だというふうに思っています。また、探究的な、総合的な学習の時間だけでそれをやるということではないと思っておりますので、全ての教科指導によって、子ども一人ひとりの主体性が生まれる学びに転換していかなければならないということは、本当に今求められている一番大きなところではないかなと思っておりますので、今いただいた意見を大変重く受けとめているところです。

座長：そうしますと、ロードマップで、そういう授業を先生方が、実際に主体性になるかどうかは別にして、そういうことを目指した授業を学校全体で取り組めるという体制づくりというのは、2025年というふうに考えてよろしいでしょうか。少し早いでしょうか。いかがでしょうか。

事務局：本来であれば、今現行の学習指導要領が、まさにそこを狙っていくべきもの

として示されているというふうに思いますので、できるだけ早くという思いでいるところです。

教 育 長：言われるとおり、それまでの部分と違って、ロードマップの部分が少し淡白な形になっているかと思しますので、少しシートを広げる形で、特に学びの変革プロジェクトについては、指導者として、どんな指導や支援をしていくのかという点も、少し具体を示した上のロードマップという形で、京丹後市としても決意を示していく方向性を明確にしていきたいと思います。

座 長：ありがとうございます。委員いかがでしょうか。

委 員：ご考慮していただければそれで結構です。ありがとうございます。

座 長：どうもありがとうございました。他いかがでしょうか。

委 員：学習者主体の取組を行う際に最も重要なのが、教員の指導観とか授業観かなと思ってまして、そういったご趣旨のご説明が事務局の方からもありましたけれども、改めて1回引いてロードマップを見てみると、まず学校や学びを変えるために教師が変わるといような決意だったりとか、教師が変わることによって授業が変わることが残っていくと思うんですけども、それが Kyotango Sea Labo だったり、STEAM だったりというプロジェクトに落ちると、2025 年から各教科での探究的な学びとあるんですけども、私が文部科学省でプログラミング教育を推進したときの感想、感覚を言うと、特に中学校は、それって技術家庭ですよ、技術科がやられるんですよと言って、各教科の先生は関係ないというポーズを取られた印象が正直あります。私は主に小学校を担当していたので、小学校は各学年教科関係なくやるんですよという示し方をした関係もあり、得意・得意でないにかかわらず、小学校5年生の算数の教科書の中には、プログラミングのことが入ったり、どの先生もやる必要があると思っていただけているのかなと思っています。何が言いたいかという、Sea Labo や STEAM というようにプロジェクトにして打ち出してしまうと、そこでやればやったことになり、普段の授業は今までどおりで、探究と名前のついた授業だけそういうカリキュラムのことをやるということにならないのかなとちょっと心配になりました。今、学習者主体の学びはすべての背骨になるような形で考えられているんですという説明に対して、教育長からも少しロードマップが淡白過ぎたので、もう少しそういっ

た部分も書き込もうかとあったんですが、一番大事なことは、学校教育においては、やっぱり教師が指導観を変えていくということが最も重要で、背骨にそれがどんと通ってるように見えるようなロードマップの書き方だったりとか、プロジェクトもかなり初期の段階で授業を変えるとか、学び取り方を変えるとか、そういった部分があって良いのかなと、引いて見るとそういった部分がすごく見えてきたような印象です。

座長：おそらくその辺りは教育長はじめ教育委員会の方々も認識されているかとは思いますが、今の学習指導要領がそれを教師に求めているということですので、学校としても意識して取り組んでおられるはずだというふうには思っております。ですので、それをより促進するための取り組みとしてこういうプロジェクトがあるということで、多分提案されているものだというふうに思っております。教育課程、あるいは全体をしっかりと見るということを考え、意識しながら取り組むということの基本ですので、その辺りがわかるように、ロードマップをしっかりと作っていくということになるかなと思います。

座長：他にいかがでしょうか。それ以外のところでも結構ですので、そうしましたら地域まるごとプロジェクトにつきまして、地域の方のご意見を伺いたいと思うんですけども、委員いかがでしょうか。この3つのプロジェクトについては、地元のお立場からどんなふう to 受けとめられますでしょうか。

委員：まずプロジェクト3の方でよろしいですか。前回の会議で出たばかりなので、まだ定まっていないと思うんですけど、地域企業のプラットフォーム構築についてなんですけど、プラットフォームというのは、例えばオンラインだけで考えられているのか、それとも、事業所みたいなところを想定されているのか。個人的には峰山高校の近くにある「roots」のような場なのかなというイメージがあるんですけど、どのようなイメージを持たれているのでしょうか。

事務局：28ページのプラットフォームについては、まだ明確にどこかの場所といったことのイメージまではできていません。前回の話だと、こういった機能を、どちらかという to 人材バンクを含めた、機能的なものがあればいいというご意見だったと思いますので、ハード的なことではなく、ソフト的な機能のイメージを持っていたんですけども、この辺りはこれからもご意見をいただ

きながら、どのような形が望ましいのかを検討していきたいと思っています。  
今日は少し大まかなイメージとして出させてもらっています。

座 長：具体的にこんなふうになったらいいのにとというふうなイメージをお持ちではないでしょうか。

委 員：オンラインだけだと、人間味がないというか寂しいなと思っていたので、せっかく「roots」のような場があるので、もっと事業所みたいなものが増えればいいなと個人的に思っているところです。予算等の関係もあるので、簡単にはいかないですが。

座 長：ありがとうございます。委員いかがでしょう。

委 員：我々企業側と学校側が、色んな問題に対してスムーズに繋がっていくような仕組みができていくと、より良いのかなと思いますし、これからますます子どもが少なくなっていく中で、先ほどから出ているような先生の人数ということにもなってくると思いますけれども、一人ひとりのお子さんに対しても、目の向け方といいますか、その子たちに沿った学習もできてくるのかなと思いますので、そういうところに期待していきたいなと思っております。

座 長：高校の立場から、プラットフォームについてどう感じられていますでしょうか。

委 員：現在も「roots」にコーディネーターを配置していただきまして、地域の人材と様々な分野で結んでいただいております。先ほどの STEAM 教育にも関わらるんですけれども、教員のマインドセットといいますか、リスクリングといいますか、そこに限界があると感じておりますし、これから更に新しいことをどんどん加えていくと言うことは、少し物理的に破綻を来たすのではないかなと思っています。その件では、こういう地域の企業さん、人材として結べるようなプラットフォーム、そして本当に思い切って、この探究だったりとか、専門の部分については、評価についても企業さんに力を借りながら、専門的な技術、学びを提供頂けるような、そういう新しいものができれば、学校の教員として、非常に負担感が増えずに、そして生徒の学びを応援していけるのかなと感じています。

座 長：中学校の立場で、地元の企業との関係等いかがでしょうか。

委 員：学びのボーダレスプロジェクトのところの、中高連携の促進に向けてという

ところにすごく興味を持ちました。市と府の違いがあるんですけども、先進的なモデル連携校みたいなものをつくって、例えば峰山高校と峰山中学校、丹後緑風高校と網野中学校、もしくは小・中学校というふうに、今までの総合的な学習の部分の少し見直しをしながら、どういう形で高校と中学校とが丹後学をベースにして連携できるかということを検討しながら、先進的に取り組む姿勢が広がっていくと、すごく面白いなと関心を持ちました。

座 長：ありがとうございました。今モデル校をとというご意見がありましたけれども、教育委員会としては、一斉ですか、それともモデル校のような形で取り組むということになるのでしょうか。その辺りの具体的なイメージをよろしいでしょうか。

教 育 長：今、峰山高校も含めて、高校の普通科の魅力ある普通科のあり方が府全体で検討されているという状況ですので、当然峰山高校における普通科も今の形ではなくて、新たな普通科の形というふうになると、モデル校として、峰山学園の中学校と繋がるということもあると思います。目指す先が峰山高校の普通科であれば、京丹後市のどの中学校においても、そこを目指してそんな学びをしてみたいという子どもたちが入れるようになることを考えれば、モデル校という形も途中までは良いかもしれませんが、最終的には、すべての中学校での学びが、峰山高校の特色ある普通科の学びと繋がっていくことが望ましいのではないかと考えています。

座 長：委員いかがですか。今考えておる特色ってということと、このプロジェクトがうまくかみ合うのでしょうか。

委 員：今後の学校の方向性について、スクールミッション、またポリシー等、今検討進めている最中にはありますけれども、の検討会に出席をさせていただいて、これだけの地元からの熱い思いと、そして様々な支援をいただける体制の中で、峰山高校だけではありませんが、京丹後の府立学校がその思いに答えるような学校の変革をする必要があるかなと個人的には思っております。

座 長：ありがとうございます。お答えにくいところをご発言いただきまして、個人的なと強調されましたので、委員個人の考えということで承りたいと思います。委員いかがでしょう。今までの議論とか違う視点でも結構ですので、このまとめをご覧になって、感じられたところ、ご発言いただいでよろしいで

しょうか。

委員：非常によくまとめられているなと思って見させていただいてまして、これがすべて実現できれば、本当に都会に負けない先進的な教育になるんじゃないかなと思って見させていただいていました。ただ委員がおっしゃっていたように、制度があるからそうするだけではなく、やっぱり大人も含めてみんながそういう意識を変えていかないといけない、LGBTQでもそうですが、制度があるからそういうふうにしていくけど結局、思っていることが変わってなければ変わらないので、意識を変える必要があるかなと思って見させていただいてました。私は京都市内の方からこちらに来たんですけど、こういう言い方をしたらちょっと失礼かもしれないですけど、田舎の方っていうのは、昔の伝統というかそういうものをすごく大事にされていて、それがすごい大事な時もあるんですけども、そんなにそこに拘らなくても、もうちょっと時代に即して変わっていけばいいのと思うようなことがありますので、地元の企業さん学校とかもはじめ、大人がそういう大事なところは残しつつもやっぱり時代に即して変わっていく、ただその形が変わるから変わるだけじゃなくて、やっぱりこの意識をそういうふうに向けていけたら、本当に素晴らしいものになるのではないかなと思って見させていただきました。

座長：どうもありがとうございました。それでは委員よろしくお願いたします。

委員：実はちょうど同じようなことを秋田県湯沢市の方でちょっとお話をさせていただいたんですが、秋田県では、いわゆる秋田県型探究学習についてのペーパーが配られているんですけども、ただ問題があって、この自分の考えの型を持つとか、ペアワークで話すというところが、実は結構ブラックボックスで、なかなかうまくできない先生がいるんですね。多くの学校の先生が我流でやったりとか、授業のイメージが掴めないままやっている先生が結構多いんです。これは例えば今回の京丹後のプロジェクトについても言えて、このプロジェクトはせっかくいいものであるのに、実際の現場に落とし込んだときに、先生方がコンセンサスが取れないとか、先ほどの委員の指摘にありますとおり、STEAM とかを大きな構えにしなくて、普段の授業になったらどういうふうなことができるのかというところがポイントになってくると思うんです。例えば何かプロジェクトをする時に、こういうふうな6つのステップで

やりましょうというものが学校中に貼ってあったりとか、どの教科に問わずどの教員も必ずこの6つのステップを使ってアイデア出しをしましょうというような思考のステップのようなものをつくったりすることが必要だと思います。例えば参考にして欲しいのは、関西大学初等部では「ミューズ学習」をやっていて、小学校5、6年生ぐらいから、思考の分類チャートのようなものを子どもたちが自由に使って、考えたりをしているんです。つまり型があれば、探究する時はそれに沿ってやりましょうという学びができるんです。こういったカルチャーを作っておくと、財源確保までしなくても、子どもたちが自由に学んだり、何かわからないことがあったらすぐに頼れる思考のステップとか思考の方法があれば、多分こういった学びがうまくいくので、大きいハードをまずつくるということもすごく重要なんですけど、それをうまくやるためには、STEAMとか何か特別な機会じゃなくて、普段の授業の中でも具体的に先生方がイメージできるような、何かそういうバックボーンみたいなものをつくった方がいいと思いました。先ほど家庭科の授業とかありましたけども、例えば入試問題だったりとかして、理科の内容だけでも家庭科の内容にも通じるものとか結構あったりするんで、こういうテーマとして研修とかをやっていただくと、先生の方でも、実際に授業ってこうつくればいいんだというイメージが湧いてくるので、実際に先生方が不安なのは、そういうプロジェクトをされた時に授業をどうすればいいのかという、その部分を丸投げされるのが先生方の一番不安なので、その辺りをサポートしてあげるとこのプロジェクトは回ってくると思います。長くなりましてすみません。

座長：ありがとうございました。具体的な授業方法のところの研修がないと、STEAM教育といった新しい教育の実現が難しいだろうというのは、そのとおりだと思いますので、今からでもそれぞれの学校で先生方ができることだと思いますので、色んなツールを使いながら子どもたちの学びを引き出していき、また先生方もうまく向き合いながら授業を展開していくということを、積極的に取り組んでもらいたいと思います。そういったことも報告書の中に書き込んで、先生方へのメッセージの部分も大事になると今のご意見を聞きながら思ったところです。その他いかがでしょうか。

委員：先ほど委員の方からもありました、普通科高校と小中との連携という部分な

んですけれども、私の個人的な意見ではありますが、実は府立学校の方で教職員の数が、クラス数の減少に伴いどんどん減ってきております。その時に、どの教科の先生を減らすかというふうになった時に、どうしても、国語とか数学とか英語とか、受験に直接関わりのある教科っていうのは、なかなか減らしづらくて、そうすると、例えば芸術であったりとか、情報であったりとか、そういう科目がなかなか維持できなくて、どうしても非常勤の方にお世話になるとか、そういうようなことになるというそんな現状がございます。府立学校についても、最近、学舎制があつて、また学舎を超えて学校間でも、兼務という形で各校の授業を非常勤的に教えながら、定数を何とか確保するというような苦肉の策をやっているところがあります。小学校や中学校も、芸術や情報などの専科の先生方の確保はきっと難しいんだろうなと想像しています。どこがお金を出すのかという議論はあると思うんですけれども、何とか府や市が連携をしながら、専門的な教科を担当できる人材を確保いただけるような、そんな方向に進んでいけないかなと個人的に希望を申し上げます。

座長：ありがとうございます。京都府の方にも伝えないといけないことだろうと思います。文科省の方でも、そうした教員の人事が可能な、何か仕組みを考えてもらうことも必要かもしれません。教職員の確保は非常に今後大事になってくるかなというふうに思います。他いかがでしょうか。それでしたら中間まとめということでもありますので、オブザーバーの参加していただいている先生にも、ご意見をいただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。

オブザーバー：私からはエールも込めて3点お伝えさせていただければと思います。一人ひとりの発達は当然シームレスなわけで、子どもの立場に立てば、このボーダーがあること自体がおかしいわけですので、その観点からも今回の方向性は大変素晴らしいのかなと思っております。未来から逆走した形で取り組んでいただきたいなということで、是非お願いしたいと思います。

2点目は、それに関連しまして、特にボーダーレスの話で言いますと、特例の話であれば国との関係、それから中高の連携ですとどうしても、府との関係が出てくるわけです。もちろん現実、色々な制約があるわけですが、是非とも関係者の皆さんが、具体的かつ、先ほど申しました未来からバックキャストした

形で議論を進めていただきたいと思います。とっております。

3 点目です。これは私がずっと思っているところですが、今の日本の学校教育の現状、小中高、大学と発達段階にあって、学校教育が積み重なっているわけですけど、一方で特に普通科や大学に行くときに、ともするとこの実学の発想が非常に薄くなっているのが大きな課題かなというふうに思っております。その上で、損益ややっぱりこの時代の実学として、先ほどから出ていますプログラミング、数学というものが、Society5.0 の中核となる言語なんだという発想で取り組めるといいかなというふうに思っております。データサイエンス的なものがまさに読み書きそろばんだみたいな言い方をよくするところですが、今からの時代そうするとおそらくその数学という学び方についても、そういう言語学として捉えるアプローチがより重要になってくると思います。その点から先ほど出ているような話の、数学と情報のもう少し融合みたいなものも出てくると思います。それを総合の中でどうするのかっていう話も出てくると思います。さらにその発達段階に応じてやっていくとすると、こういった形で中高連携というものを、本当に真の連携をどう取っていくのかという話もあると思います。このロードマップを見させて頂きましたけど、その具体化の方を是非お願いしたいなということ、オブザーバーの立場として勉強させていただきながら思った次第でございます。冗長ですが以上です。

座長：貴重なご意見ありがとうございました。もうひとつ、接続がうまくいっていないようなので、メール等でも結構ですし、教育委員会の方に何かご意見をお伝えいただければありがたいと思います。先ほどおっしゃっていたことを、未来から逆走ということですが、Society5.0 は、まだどういう社会かはわからないわけですね。この報告書の中でも新しい社会としか書いていないわけですので、おそらくどういう社会になるかは、これからの動き次第、あるいは私たちがどう動くかによっても変わってくるようなところがあるように思うんですけれども、だからこそ、京丹後市としてどういう未来を考えてそこから逆走して、学校教育でそれを取り組んでいくということが求められるんだろうなと思います。あと具体的には、数学的な情報ということの基本言語として考えていくって発想も大事になってくるんじゃないかというのは、これからの社会を見る時にも非常に大事な視点をご指摘いただいたかなと思

います。あとはよろしいでしょうか。問題意識とか、人材育成の方向性とかいうところ、あるいは今後の検討課題というところで、何か抜けていること疑問点とかいうことがありましたらお示しいただきたいと思いますが。おそらく今後の検討課題のところは、今日いただいたご意見をもとに、少し書き換えていくことにもなるかなというふうには思います。では次の議題もございますので、先に進ませていただきたいと思います。貴重なご意見を活発にいただきましてありがとうございます。では続きまして議題の2、子どもたちへのアンケート案について、事務局からご説明をお願いいたします。

(2) 子どもたちへのアンケート（案）について

事務局：（事務局から説明）

座長：ありがとうございました。ではまずアンケートの作成のプロセスも含めてこのアンケート案につきまして、ご質問やご意見いただければと思いますがいかがでしょうか。委員、中学校の立場で、この内容はいかがでしょうか。

委員：例えばというところで、学校が具体的に示されているので、子どもたちはイメージをして回答することができるなど見させていただいて感じました。

座長：実施時期はこれで大丈夫でしょうか。

委員：はい。

委員：ここにある選択肢というのは、基本的に理想とする学校のイメージだというふうに思うんですけども、比較対象としまして、今の学校の姿って、生徒が何点の評価をしてくれるのかなっていう、そういう部分があってもいいかなというふうに感じました。

座長：多分今できてないからこういうのを出てきてるんだということだと思いますけど、その辺りは実際に生徒さんとインタビューされて、今の点はいかがですか。

事務局：生徒さん方と色々な話をする中で、やはり中学校を経験して高校生になっているということがあるので、高校の時にこういう学びがあったら良かったのになんていうことを大変たくさん語ってくれました。今の学校が何点という点数化をして聞くというのも一つ面白いことであるのかなというふうには思いましたし、またその点数は真摯に教員は受けとめなければいけないのかなと思った次第です。

座 長：実際に生徒さんの声というのは、委員がご覧になって初めてこんな声が増えたというような感じでしょうか。

委 員：はい。実は本校の生徒、教育委員会の指導主事の先生方と、こういう関係づくりの協議をさせていただいたということで、生徒の方も大変喜んでいました。来ていただいた先生方、大変面白くて、話が盛り上がったと見ていまして、なかなか自分から表に出して発言することが若干しにくいんですけども、実はたくさんの思いを秘めていまして、機会さえあれば、たくさん色々な思いが出てくるんだなと感じています。こういう生徒の思いを、高校の現場でも何かこう聞いたり、そしてそれを発信するような、そんな機会が本当に必要だなと感じています。

座 長：ありがとうございました。多分あまりこういった取り組みをされてこなかったということだと思うんですけども、指導主事の先生方が引き出したところがあったと思いますし、聞かれて初めて生徒たちも考えるということもあると思うんですが、でもそういう機会がなければ考えないということだと思いますので、それを今後の学校づくりの中で、生徒たちが主体性を持つてということであれば、生徒たちの思いというものも常に確かめながら、向き合いながらやっていかないといけないだろうと思いますので、こうしたアンケートを作る、そして取るという、このことがきっかけとなって、その大切さというのを先生方が気づいて下されば、こういうアンケートを実施して良かったのではないかなということにもなるかと思いました。他、いかがでしょうか。このアンケートとか子どもの声っていうことに関わってでも結構ですが、委員の皆さんで何かご発言されることはないでしょうか。アンケートの結果が、次の会議で出されると思いますので、その時にまた意見交換できればというふうに思います。では次に進めさせていただいてきまして、その他ということで事務局の方からご説明お願いいたします。

事 務 局：（事務局から説明）

座 長：では、今後のスケジュールについてご予定いただきますようによろしく願いいたします。では以上で今日予定していた議題等終了になりますので、本日のこの会議の議事の方はこれで終わりたいと思います。進行を事務局の方にお返しいたします。

事務局：座長どうもありがとうございました。委員の皆様、本日も、色々と貴重なご意見をいただき本当にありがとうございました。中間まとめの案につきましては今日いただきましたご意見を踏まえまして、事務局の方で整理をさせていただいて、改めて、委員の皆さんにお送りをさせていただきますので、再度ご確認をいただければありがたいと思います。それでは以上をもちまして第4回の京丹後市の新たな教育人材育成のあり方に関する検討会を終了とさせていただきます。